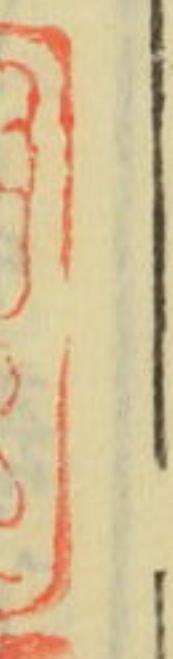


9 80 1 2 3 4 5 6 7 8 9 90 1 2 3 4 5 6 7 8 9 100 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11

卷之五
2229



靜居藏

平易文鑑序

卷表類

上口天滿宮文

花起請

報恩表

敕令類

双林寺修石碑教

落柿舍制札

書狀類

答元甫詩書治文

返狀酒盛四移文

贈龙溪老人書

落書申白紅狀

差表類 告天瑞宮文

あら因

而傳の事のアセ也自比ははの國中皆のソレニ天瑞宮
の事もくちへかへスル所故にアシテナリヤマムシ
アシテシツクノ年のみたゞスル事とガタムシ於る事
ヤクシムシトヨムシのアシテハヤマムシモテアリシ
ヒルシテシテアリシトヨムシの代とモテカヘテナリス
アシテヒムシ叶シ多月のモカリタモスハヤマムシ
アリシキナミの園とモカウタセコトヤマムシ
アシテヒムシの庭とモカウタセコトヤマムシ
アシテヒムシの庭とモカウタセコトヤマムシ

ムシアテ而葉庵ミアシラケテ御事ニテ金の内ニテヤ
アシテクシキト作ケテテアシテカシカモカモサタカモ
新ヨリテ陽山離のヒヨーレアシテキモカモシルス上
のアシテヒムシの實加アヤセトヒヤモカモシルス御事
リケヨリム二と四の五百石シ一匁ニシトモアリテ
叶葉文アシテアシテケリトキモキモス。

れ云此一章ハ向葉庵記トテ羅性ノノノ旨傳也(レカ
結語ハ一句ニ首ラツツテ神前ニ奉ルトハカリ首テ祭
ハ何トモ題セオハ或ハ奉納、即トモ云ハシヤ去レト首尾
氏ニ神靈ラ益々ハ結語ニ亞述有、詞ヲ加ヘテ言ニハ

天王寺 魏ニ入タリセ等ノ沙汰ハ既増加ノ法ナヨンカ但シ難波
ノ梅羽トハ室因門下ノ御早ナレハ玄三モ梅ノニモ御セリ

も起居

小むらよ

もくしもじかくをソボリテテムタクアマリ
ソラヒツメの間ニアリテビトニロジタ
ヒシキテテルアリトベアラセホヌ
マニシヒツメアリトベアラセホヌ
マニシヒツメアリトベアラセホヌ

かのこあちかリモヒトヒトヒトヒトヒトヒト
キアリトモカツカツカツカツカツカツカツ
ね云改文「武城ノ人」待傳^{テサニキ}金ノ拂物ト古リ
名レハ改文ノ熟ヲタルニ先ハ高家承ノ歴々ナカラ公表ニ
遊逸ノ咎アリテ暫ク空居ノ様ニタリタリアルラ逢坂
逢ヒカタキ詞ミリ憚聞^{ハカリ}ノ名ニ寄セタル筆ヲ留ヌテ赫^フ
手ニアラヌニ誠ニ天質卓ノ文者ニニテニ葉守ノニナハ時ヲ
得タリト云ヘレキヨリ小笠翁ハ芳原ニ退言レアリテヘモ天下
ニシテノ名ヲ残セリ仰レシテ下墨各シテ其レカ折言ノ詞
ヨリ穀文魏ニ題セルハ足ラモ運揚ノ様轉トキルレ

報恩の表

東花坊

おをかうに従事すと申すが如くおもての國へも
うへて他諸のひきりせまわかなくまじめの國へも
お路の多くと遠かくあるとまづい体とおさの内人
もくられのこよしとぞとく一やうてほゆのもの
あらひ武の内えうけをまくえよまん歎の内人ふ
きく十哲のふみるあんやれ皆をひそばく「うや
すく」オ子かくておゆの内へはくじく所を理
あくはあくとつまむとくわくおやのうき

のわもととまわうそらうに仰恩のオニトシヒキ
湖南の喜とあらひ海か山西の秋とふくわヒリ百も
七将とからでそらうに仰恩のキニテ「トナリ
ヒキの裏とやわよて仰り山音のよしとがんじ
の感と涙とふり人と金と手のあとけみてと實に
石々の頬とえりぬいとやオヨラキひのちうせん
そばに仰恩のオニアリーゼよんにこの恩あ
財をよのきう令下とひくとくと仰りけんせ
のうとうありふくに國のむくひがくとせやせ
内ふとくへて武雄と其南風雪をひくはるま

よ仲あらねは足利を高門のありにて武つゝ許
あり曲多氣あらせのなと一力す玉堂をも鎮西と知せ
西柿全の謀よりいと役あれ不玉を惟萬事のみよ
尾張と露川河と義濃へてえりり社國を廢しむ
のふす北枝吾仲を今之幸ひしく那高を若光
ケモねいの正秀と難波の朝市も賀月乙丹へ年族
の住ともしまくも謹を尾隊の古門人とらへる御望
のくへをやへてんぐと一りとお龍門ふとおと
凡新の先達とあふげんやもとせそ七十二年の竹
角のまのひまへけうわと呼べるふとくみ

あらぬまをまくとおだかにまきまくとおとせのるや人
御まことほくと或らまのまかぬ當面あらとすじゆ
人のせれりひりてあらとまくとくとくとくとくとく
くとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
双親とちひてねと所とあるまことにふくとせすの
處にほれとくとくとくとくとくとくとくとくとく
敵れるととくとくとくとくとくとくとくとくとく

報恩の事ニシテもんとオモウアセテ七年の歳とみやう
てお年暮に十石のかんとせぬノハヤ一體もあつた
日々の朝と夕方とおのじよとがくとくらむにあ
食うてやのととせむととく伴おうあらす
からせとあわてまく祥の便とくよのまくと風流
ススムのあともかく一室の住居のあへりとくら
きまく報恩の事ニシテあんじられかせの間合と
そよとまきを年もマタニテ仲間のやうのあつれ
スをあさり功名の雲のあらへあやかちうがく

アレシテアラキヤアテヒタトアリテアリの國アヒム
やアリナシの國アヒムアリテアリの報あつてアリ
アリその國アヒムアリテアリその報あつてアリ報アヒム
の碑と廟アヒム生ふのちアヒムアヒムアヒム碑而
アヒムの石子アヒムアヒムアヒムアヒムアヒム
アヒムアヒムアヒムアヒムアヒムアヒムアヒム
アヒムアヒムアヒムアヒムアヒムアヒムアヒム

狂云此表ハ教師ノ丹鷗ヨリ出テ一言言モ筆端
歎嘆ヲナオス教師ノ豆盧實ハ解アズシ然ハニ固ニ

三報ノ實地ナル僧シテ碑面ノ文ニ數三百千ノ圓ヲ配分
セル起結ノ文體ハ此を吉ニ致フ（レオハ舊行元金を各
ラ奉ケテ先達ノモトヨハ此表ノ辞美ニシテ石碑ノ額もヒ
此表ノ額立宗ナリ或ハ師固ニ功名ノ一對ハ露雲ノニシ
奇絶ラウテ文ニ文アリトハ猶スレ但シ不_レア_レ鹽將第トハ
禪錄ニ朝昌尊ノ歎ラムイテ一モ一廢ハ薦盧全_レ詞ナリ

教令類

雙林寺修石碑教

渡部行

有司シケヒリナセトノ母あリテモアリ仰めイモノ
アリシタムノアツ父母の恩と同モルモサシムノア

仰の臣よひひひんや尊に讃詔の文あリテナリ仰
セラキ武の苦蕉庵ヨーサヒカ葉の臣とがリ_レモ
オモハ濃底の東華坊ヨーカ盧一實の法と仰ヒセキテ
之仰の臣ヒシルモテヒキナモルトミヒヤヒルを
寶永ば宣のまう洛ものみ林寺に假名の碑と造トテ
ミセバ不朽の功とアモヒニクモヒシ自十二トモリ
ヒムクレヌモアドヒトスツテ多ニ年くの年亦
ハナナリ山野の孤あヒムシホジアモトリシヒトスカ
行立モトモアヒタシテ天下の行基事と況_レ勸化一感の
ちうとはきかー_レテ_レ付_レ禪院園の書金とも_レ今

のりに佛師の軒と門とをもて、溌縝のひこまつらす
とおちりて而後まことにひきよわづくもひのそし像と
碑文の御名とをうねすて信函不退の志とほざむ
年々碑面の下書きとあくまじめくに佛師の盤と
せりけりくよどみの意とやかく伎焉とて而極もあれ
テ一月上院より第一園は款王の令旨にからめて渡御
ケアリ。ひぬほくつてふくしう施り立つ。もや
紀云。此教ハ傳主をなカ文法ニ效ヒテ宣ニ款王ノ令旨
ヲ促セリ。去レハ北書ノ教スルアハ年々三月十二日ラ以テ
東山ニ墨直ノ會式アラントラニ水ヲ後東ノ門ヘニ

催促セリ。誠ニ北諸ノ名マラシハ誰か合信ノ為ラ存セ
サラン。祥園ノ金トハ石碑造立ノ時ノ地費ムシイ供
仰ノ料トハ比特ノ香草料ナリ。けねニ年月リシモ
ラニ童子テ信函不退トモ云ルナリ。或ハ一巻一戸墨アトハ
祥詔ノ一花五葉モラ借ワテ一万ノニモラ錯綜セヒ花葉
虚實ハ奇絶ノ意を對ト云レ。但し出山仰ハ故翁ノ持仏
ナルヤ。佛師ニ附屬アリヒラ再ヒ此寺ニ奉納セリ。或ハ石碑
ノ説文ナト一軸ノ御名ラニ陣ニ残セル寺宇ハ碑文類ノ下ニ
但し翠園ハ山莊ノ名ラ差レテ當時ニ諱ノ恐アレハナリ

落柿舎制札

仰詣奉行

向去來

- 一 犬あふの附添（アシタマ）と申す所
せの御處（メシキ）と申す所
一 新屋屋（ニイヤヤ）と申す所
大齧（オシキ）とかく申す所
一 おえじく申す所と申す所
や魚鳥（ヨウノウ）と申す所と申す所
一 速（ヒテ）と申す所と申す所
たゞと申す所と申す所

- 一 隆（タカ）うれお膳（スケトク）と申す所
大の身（タガタ）と申す所

右條（ミササギ）

右云此令ハ四處一毎夕ト見ヘレ去ヘト蕉門三花人ドリテ其
性ハ殊ニ雑實ミシテ常ニハ言語ノ通ニ致ル故始ノ一傳
フニケレテ後而西條ラ與スルノミ去ハ此時ハ嵯峨ノ落柿舎
ニ五七軒ノ角人來リテ故翁ト同シ遊ルカ其人々ノ癖ラ
云リトフをモ公表ノ制トハ見ヘカラス誠ニ落陽ニ去來
アリテ鎮西三俳諧奉行ナリト故翁モ称レ給ヘハ雲ニ
モ

奉行ニモラ用士或ハ行師ノ事より記ニモ去来ニ煙筒ノ
掃地ノ古ヌアリ煙草を簾ヒノ人トハ又一タリ或ハ隊ノ居膳
トハ屋敷守ノ時平ヤ方ヨリ朝夕ノ膳ヲ嚙ムトフ但レ
去来ハ向井氏ミシテ洛陽ニニ松ノ浪人トフ

書狀類

答蒲冠者狀

源賴朝

十一月十日ノ後ノ西月ニヨリシテ未トクニ延ニ脚力
乏シアリテ足運ヒテ脚力乏シ未経キモレニロ
多ニテ辛甚キサヌケルトクニモレニロトクニモレニロ
ナシトクニモレニロトクニモレニロトクニモレニロ

トハノ事ナシトクニモレニロトクニモレニロトクニモレニロ
當ナヘ國の君の心と叶ナセタナカニテナシトクニモレニロ
ヨリ又ハ筋骨もアリヤモトアモヤケリ希ニ二位歟ナ肩
もアリカナアリムアリナシテヒトトクニモレニロ
トハカクヒトニモレナリ未だナレニ二位歟ナヒトナヤケトクニ
マツキモスアリムアリナシテナリヒトアリシア万ヘ三帝王
ナヒトクニモレナリアリナシテナリヒトアリナシテナリ
討マツキモスアリナリアリナシテナリヒトアリナシテナリ
ト討マツキモスアリナリアリナシテナリヒトアリナシテナリ
歎ヒリナリトクニモレニロトクニモレニロトクニモレニロ

トハツミノトモカ自害シトドカ生捕ヨリテ
ホークーと/or一トロトセのまよつひけアム
キミシトモヤソモケムサヘのほりテモ東
アミタセイシトモアシテモサヘカヒセモヨ
モトト大賊ナモトモハモトトモ作合シカモ
穴壁ノ 中零
役ナキモハモトトモハモトトモ作合シカモ

アリイヒ

ト云此サヘ東鑑和ニ在リテ其代ノ人モ感レタルヤ假名
ノ文はハ此一ナリ志ト内藤六俊之本ナト軍馬江口

ノ用ラ中零レテ寛ニ天皇ヲ官ナトノ至ニカラン古ヌラ零
天トヨリ殊ニ庸頃ラ教訓レテ人ニ悟ニ給ナトハ仄ニ
義経ノ利益ラ誠メ玉ル五百年前ノ人情ラモ看破
スレ然ルニ富盛ノ憶ニ病ラ歎キテ足ラ生捕ニスル
事 惟惺三千里ノ勝負ラ知リテ誠ニ寛仁大度ノ介ニ

蓮上人

トハツミノトモカ自害シトドカ生捕ヨリテ
ホークーと/or一トロトセのまよつひけアム
キミシトモヤソモケムサヘのほりテモ東
アミタセイシトモアシテモサヘカヒセモヨ
モトト大賊ナモトモハモトトモ作合シカモ
穴壁ノ 中零
役ナキモハモトトモハモトトモ作合シカモ

法文

却ノハシテトモアリハシタリト仕事の跡トクヤ
まきとヒキムカシカシヘリ御史ニシテ在エ
御子ノ名アリト信の法定とシテ人の近附あるを承
トクノトメ念れのミタニアリヒテリテリセ
ヒルモトメ御史竹千石ノムニシテムニ御史
西ノ人モサシナシテ御史竹千石ノムニシテ
望ム御史竹千石ノムニシテリ一月ばかりで御史の
カサシテ御史竹千石ノムニシテリ一年半トモナシ
行すとドモ御史竹千石ノムニシテリ一年半
不寄りマシテ御史竹千石ノムニシテリ

松葉文庫

文庫記

仁云御文ハ背レ平假名ナル其後六行假名モ唐也
トフミシハ百字帖ノ御文ニ全ク他カノ本體ヨリ信ノ一宇ヲ
詠キ尽レシ玉ヘルカ殊ニ其ノ四帖ナト何ノ子細モナク安心
ニシテラ捺リ込シ玉フハ般若六百卷ノ叮寧ニモ勝リ
無智ノ輩ハ言ニ了解スヘシ本ヨリ上人ノ善知識ル文
ニシテ且ツ雅ナリトムハシ然モ知識ノ最期ノ詞ニモ残モ
惜シクアキキナレトハ言ニラ文章ノ感仰ニシテ人天モ此朝
袖ヲスラレ草木モ叶詞ニ御レソヘシ志ルラ輕政ノキラ評ノ

身ノん累ノアハ成ケリトハ武士ノ本意ノアハレトキタル人ナト
ハ辭内ニハ伎俩ト云イ誠家ニヘ瘦我ト笑フ凡雅ノ哀セラ
知テサルニハ如何シ誠ニ此文ノ有難キ所ハ此等すノ詞ヲ文鎧
トヘタルヘレ

近忙

近忙

くきをアドクツリ以テヨクアカムリノタクミアト
ヨクモコトニシテシテシテシテシテシテシテシテシテシテシテ
シテシテシテシテシテシテシテシテシテシテシテシテシテシテ
シテシテシテシテシテシテシテシテシテシテシテシテシテシテ
シテシテシテシテシテシテシテシテシテシテシテシテシテシテ

下井川行江ノ子孫也テ

八月

右云此其ハ城南ノ第五五ニ在リテ吉絆ノ麻薄丸文は
ノ卒アル人ハ龜カニテモ捨ツキラ何事ナニカシノ和尚ノ金絆
金泥ヨリモ足ニ歸繡ハシラ添一タル誠ニ流ノ祖タラニ
モ君之書又三才ナルラ凡雅ハ往古ノ唐無々ラ知レリ

酒盛移文

橘佑役入通

起のものに福玉すれどもアリモチヒの南ノ別荘
ありテ卒ルアラナモソタクアラアリモテ吉清行

の奥より見て山の勝負となると九月
廿九日もさういふのむらを山陣に所
あり村役と同賓とまわれば、いそぎて言葉にてよ
ともやうとや次つゝと軍ひの山門めあらすの聲
のからぬあり皆もかの毛衣と錦の直幡ヒタチとこれ
より前の中へ通ふやうにすすみ五位の彌宣とえや
きりまにゆく毛衣をもさうとへうきのまへま
あへきりとまらきのほきうて袖もひやうんやうく
きのあへ比花もあらうりてね陣より七兵衛
をのぶすちゆの上へひそかれて籠と水村山の郭の

里と呼南の山へおもひそなむの福とひと目とがて
風し候。雪ふりきりあふ太陽もすに見え鐘カニヤよ
ばとさうとるととくつにたまへとひらひらとまへ
うふこよとせ。若織部カスガとおなじにらひ
中へ通うて、くらのまきけふうの腰られ
て、やかな脇息カキとあわく額枕カニヤと肝カニヤ
膝カニヤもとにすまうとけのる、桂花樓カニヤと通かくアマ
ミナリとおはのくにゆのまうとせ。余也
往云此後文ハ虚誕ナレト附くニ文三章ラ鎮メテ軍書
異ナル事格ラタルレ去ハ武藏野以下ハ益ノ名ニ對ソ

穀檢ノたゞ即ト云ルヨリ汁椀以下次郎ニ即チ家業スシ宣
ニ福寺ハ作ト云ルハ富國ノ高田ニ名ラ知テ家紋六臥牛
ナリトヤ然ニ比作也ラ依度入道ト云ルハ例ニ我師
ノ在名ナカラ某ノ隣國ナガニ追レ我師ハ孺ノ庶流
ナ

贈尼粟老人書

朱菴作

やうにはゆふむりお老人をじ一がみのり所とづくきて
はよだ西のラノヒヤムトサのよに陸夜あり波あら
過角と竹風と痛とあれど其のの俗諺とはちかくま
よこのの凡雅ヒヤムトセよあらて波う室次第し金玉ハ

アサヒシヤマテハシヤドヒツ内あり波う室を西のラ
ヒタカニ老の後記アキタク西ふと西方の後
あすあありアメアリアリアリヤモナリヤモセモ
アリアリアリアリアリアリアリアリアリアリ
俗諺ハシノミトテ変化スホクナリトアケハシヌ
アリヒタカニ人ノアシアリアリアリアリアリアリ
アリアリアリアリアリアリアリアリアリアリアリ
人ヒタカニテ稚^{ハツキ}稚の中アキシ盛アリ湯をのむ
あらきくらきのあまヒキナリキマヤツのむ

至教ひのがれとのをくらふをもとしに勝をもと
今やてれはるの静まくはなりとせんとて
人向一の変化もかくのとくふれに詠詩一せの変化も
かくゆくのとくはりてやま花坊ももとの御ごとてに詠
もやあらよく古戻の聲よまとつて竹あたぐ
音無トト被うるる藤にまちよ一叶のきくいよ里
よらむれらしやまくらぬ二カコタシとふ圓あく井
を人もかとさとひやうつてよのけに客をこゝに
よそぞの國の人とどくべくわら變化もとへをく
せんまくいせりてを人と仰そむじゆりとくらげ井

のゆき方にめぐみへり書よ南無のテよとらひて
阿弥陀仰のえじよみよへりあふへとゆとされ
狂云此書ハ殊ニ實地ニシテ文章ニ鼓舞并テナカルヘ今
教ユニ親仰ノせナリ况や凡雅ノ筆情ヲミセル禪門ノ
法語ノ巍元^{ヤコウ}ニアルニ似オラン去ヒ大師ノ文章ニ戯言狂語
ヲ召キタルト故莫又古典ヲ用イサルト總テハ其時ノ官レキ
薩^{サク}レハ其ハラ盧賓^スノ應用トハ互ナリ然ラバ此書ノ所用
ヲ見テ盧賓ハ水波ノ障ナルヲ知ラバ始テ文章自在ノ
人ト云ハシ誠ニ此書ハ人向ノ進退ヲ云イテ自己ノ能詔明ナリ
ト贝尔シ但シ左雲ハ越今町ニ住ス此也、古ノ直江津ナリ

二宿書

今門了俊

一章の同れありとくにたまくもとてむねのうじいふを
詮るのへりもわあきやんとすも大よのそれの
えき今に承取ひうき

このよきとくとて候おほせよアを乞うにしす
がのち月を候すも河の面のすよ御行かず、一言
わざとさくらえやといひもと傳へてはキモリ
日往直うりと車行トモとも歎の作ざれどを

信一もう一叶とせり行ゆき風うけりかこら
まつーとづきまわす佐也モ祈禱而て今りの名
葉のく勝きとて佐也モ同れとすまは傳也
不也又利翁りわふらむとくを勝セキ
新あやの不様のくみ能因は仰う事の事とねよ
之きるそぞくとひれり御も向かくもむか
おうもとおもむくらむれりとくとくとくとく
もーとおとまことにをもととおととやうる神々
やがくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
アシハリ人とおおとくわくとくとくとくとくとく

而すうかへんちくへめたりさけらるりとまづれむ
和云舊書ニシテ漢文ニ在ケテ本朝文粹三毛山セルカ
何レモ御ノ遠イアリましハ舊書ハ吾人達ニ仰仰ノ當時ニ
適分ノ傳アルヲ評シテ始ハ舊書記ト題セラフ且後ニ
冷泉五家ノ披露ニ及々ハ舊書一露頭トハムルトソ然レハ
此考ノ古文ハ諸家承ノ異説ニ千くナルヲ我家承ニハ私抄アリ
テ偶タニシキラ評セラマリ其ノ抄曰先ニ能周ハ春秋
ノ程ヲ經テ万里ニ遙ナル情ヲ讀ヒ後ニ賴政ハ其ノ事ノ
詞ヲ借ウテ青紅白ノニシテ五色ノ次サラフ詠シタレハ
聲一都ト曰向ノ向ハ一すアリテモ遠近ノ論ニアラス然ハ

能因ハ向情ヲ讀ヒ賴政ハ夙年ヲ詠シテ御モ賴也ル所ヤレト詫ニ
能因ハ出字ラ以テ考ニ遠近ノ情ヲ知リ賴政ハ見字ラ以テ
考ニ青白ノ姿ラ見ル本ヨリ詩考連體ハ姿情ニラ辨ニ殊
ニ夙年ノ先タルラ知止ニ但シ伴手入通モ其等ノ秘抄ヲモ知
ナヤラ和歌ノ奥義ラ含メタルヤ不等數ノ論ハ實ニ明ナラン

申白記

蓮ニニ房

統七後シテ御所ノ御御跡の御障上を有するも之行と
あくわす一すうち其方ゆきのを行ひまよふのやつて
其事あれとありて御所ノ御御跡の御御跡の御御

三日月旦記とどきを十鍵法がくノアム一ふうしちニテ
加藤一橋よりはるす一橋にてせんめりくおお
ひきをけしアヒリタマヤハキ等の事も語り
ちぎれの書和木と御もと御のとらへちと
御みよかとモシイもと御もと御のとらへちと
ア席に坐すからくしよまわ竹扇とはくと
アテ袖をあわやをといひておびての扇するが
とてけのとくやかかとてても御方のとくわざ
もととけほらをとくわざと裏をうねとむす
連にとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

はまくわら御所の御所の御所の御所の御所の御所
て人のあらあらとまわらとまわらとまわらと
かくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
かの保保とくとくとくとくとくとくとくとくとく
て同ぶの人とせとせとせとせとせとせとせと
唐宮とくはのまくとせはとせはとせはとせはと
の殿宮ととくとくとくとくとくとくとくとくと
せが波もとくとくとくとくとくとくとくとくと
そとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

ましりとれすいおつへー 完貲

右云北伏ハ尾城ニ便ラ求テ邱陵へ書通ノ係伏ナリモ
此書ノ趣ハ後ノ序類ノ下ニ通曉スレ去レハ法善ノ鏡
トハ此人ハ常ニ缺鏡ヲ以テ人ノ五臓六腑ヲ照ヒテ其病
在玉ラ知レトソ但レ極隣ハ故弱ノ従牙ニホ鏡合ハ而里方
姓ギトリト河レ先師ノ而識ナリ

七言文體方五

論類

博學論 憨知論

解類

念仰解 九口解 養生主解 地圖解

傳類

正直信傳 三藤六指傳 白狂傳

記類

枕記 白鷗堂記 獅子庵記 往來松記

六花亭記

博采論

東菴坊

我がよに子文と換玉の二あり博く多くせん所以
ともあらわにと論語よりれ論語よりれとあり
まにあら人をわの表とくそて儒仰危甚の書籍
より和屋のうすすくすくすくすくすくすくすく
あく経の書にあくすくあくとせんすくすくすく
のとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ
あくとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ
あくとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ
え種を書くひまくらとびてやうけはすへ何な

かく詠とやとせちとあれやとせんととくもとじりと
作者の情とほまれにそとにわりよ五車翁瑞とよへ
實にあらわの裏と皆あらて儒書と終と和論語と
歌ま仰既に暫くは詠不とせずて林迦の拈華のね放
すららとめいがくれ子の象序を何をかく歌を詠
すれい子の歌迦の詠あらんとて此聖の體と育破
すと詠ととくすとく詠かはるとくすとくすとく
前の聖人を儒書仰既と金銀とばつて一年の所以
ともあらんに後の聖人とも咲喟すゆとて墨雪の

わやうれとあきらめんに猿の山ひしをまよひて
まよひつりけ手のへきゆすの席にほりあひて
せのねぢえらひの書よみてたゞそものち詔の何の猿よ
やうせと後のみくよも配ちわれて書物のあらかぢり
馬ちやーせれと菌院寺の種蔵よびりこみさむ宮海
の文庫よまゆふあいの猿に人のり傭とあひて所行
所行の媚をうらうに鬼神と感ぞらう餘情と
うれぐ人間をやーて西夷ぐる者せひよりはすの
行すみ事ハうそのが北通情あうどやゑわせの人
のりせの猿のよらすまよ末せをかうじては國の猿ト

されて家と用やぐ人間の猿巣とほく野山よどぎ
何ひちう猿あーーはかと子若の山論とくと
詔よまよまよまよまよまよまよまよまよまよ
のうかとまよとあく行へておはんよだ遠よせの
くらむてをやーー猿をかく山帰よあくすけと
まくすくすくすくすくすくすくすくすく

博知論

西安寺

計かりよにまよよ表裏の二ありよま言語もあらず
あらはくち人の腸とあらはくあらはんいつれの年う

武陵の芭蕉庵よりアリテ阿翁と社津と云ふは、や
鶴鳴社と鳳凰社の平仄も例にあり、あくは故
かく、作れどもをふ御君、詮と云ふに詮倒
競奇トシケル以て、けのまことに奇怪と云ひ、
あくと倒詮の所以あんと詮かと云フ。行人よ
あくにたれき錯綜顛倒の法とて、上と下とをか
きこねくの句法とめも云フ。軽倒の所以とあくと
人並一もくに阿翁の風情あん石人一そに、康々と
云ふ秋野の面露と倒詮をりちやや和屋とけに
あくと詮かと云フ。二人ともくにあら家の秘が

云々と詮かと云ふをかうと秋のやうと上下へまかくす
名へのもくとひのつひにて倒詮の所以とあくと人
並一もくと和屋の通情とくに、社隣へ絆字のを活と
云ふに錯綜の所以とあくとあ康々と云ふの多サ
とついてねら倒詮の所以とあくと、寔と博字と
金銀とほくと錯綜倒詮のけんとおあり、博知、
例の半袖とほくと、死活多サの所以ともんとせ
られへば、すにかくとち人の情ともくと、ゆきと赤人
のうのすいと、がのうすれもくと、かんと、西りは解
のうの煙を风ふあひくと、五とよと、やむしと、す

お人のまこととハ富士の山もくしてこふへらひ
りがのこよきに漫々とて般若山に下そぞ
あらへ西河の駿河ある。云下せぬの富士は傳
て五子の太風いと差しも一また風ありくと接孫
正徳にらむと西河の三の子もさうものから
ハ接孫あるの孫ねともじへ一済よ西河の子を
風情をのぞへりしちてありきり好スキと人もありやん
御の寫士と駿河あらとす有のありと自讚さん
又風よあひくと味とほきくかす思體すとての煙
望きうひほどの被けたるやうめんあへ新古今

判者とうらみの西河の新古今に判者とうらみの
山に上りてされ論をひいて二人ともかきの中れ
仰あうどられよよよよよよよよよよよよよよよよ
儒仙を在りけりけり連能とよよよよよよよよよよ
う勝とあうて今れ掲るよよよよよよよよよよよよ
ところよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ
え皇五帝とよよよよよよよよよよよよよよよよよ
はく一儒仙の家の人相とらう行幸れ人の數
よよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ
よよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ

ハ子文の高ひトモアツキ

狂云此ニ論ハ本ヨリ一公廟ノ趣意ナルラ張子廟ニ東西ノ銘ニ效イテ東西ニ華ノ號ラ出セり去ヘ前論ニハ唐天皇ノ博学子ラ奉ケテ拈華葉持モ其音ラ知ラハ儒仏ノ言詔ハ何ヤ暗カラント但シ蘭陀寺ト云龍宮城ト云ル博学子ラ嘲ケル狂詔ナカラニ仲ノ希有ヲモ取合ハセタリ然レハ其人ラハ白猿ト云イ其戎ラハ岩猿ト云ル例ニ俳詔ノ筆格ヨリ虛實ノ所ラ見ルキナリ後論ハ和漢ノ風流ラ合足テ古人ノ心腸ラ知リ名ト古人ノ言詔ラニヒタルトノ摸倣ノ向ラニナリ

去レハ杜律ニ秋直ノ詩ハ鸚鵡啄餌杏糲粒几几樓
碧梧枝ト甚語ラ直ニ云フ時ハ枝ウナハ支脂ノ韵ナハ
傳ナク凡堪刃心スレ前ニ秀稻ノ粒ト云ハナレテ精字
カラ死字ト云ヘ次ニ朝康ナ白露モ秋ノ野ニ凡吹レク
白露ハト上下ニ轉倒レテ凡ノ吹レク秋ノ野ハト白露ラ
然レニラ上ト下ニ置ク時ハ白露ハ縫ニ粒ニ粒十ラン
上ニ遊ハセタレハ其野ハ露ノ置乱レテ欵モ薄エ兒ル
ヤウナラシ然レハ死活多サノ四字ラ以テ盡尽ノ詩乎ラ
准レ山せん筆力ノ神ニハ敬事クヘレ況ヤ西行ト古人ノ謡
撰集ホモ同レク判者モ同レキニ兩人ノ喜怒ノ各別ル

多ニ之仙ノ本情ニ遠近フニシクハ拈花棄擧ノ意トテモ千
歳ラ今ニ見透サフシヤニ諦ハ總テ所ツノニモラ詮レ
テ儒仏兩道ノ至諦ナルニ高ノ一字ニ及章ラ敵ニテ兄ル
人ノ理屈ラホトキタルニ虚實只ノ文體トハ多ノ古又ナリ

解類

念佛解

法無上人

セヨ一念十念三十往生もトクハムニ念佛と廉れ
トヘ信うりとトモハムニアリ念佛と持まどよトム
ヨリ一念十念と不定トヨリナリ信とルヤハム
アリ信と一念ニ生とスリテルトドケトケレ

一念と不定トヨリナリ念佛との念佛とレニ不信の念佛
トヨリナリトモ故に阿弥陀仰ヘ一念ヨリ至の往生と
モアトモハムニ念佛ニ往生の業トアリヤ

狂云此丈ハ一言芳説ニモ在リテ此トハナレ相違アリ
マレハ此段ハ決定ノ二字ラ解セントテ信行一致ノ
念佛ヲテレ玉ヘルヤ誠ニ一度ノ往生トハ済ヌ事
一事雲ミシテ十念一念ノ直説ナルレ

九品解

并序

是仰序

却に走江津の過角ハニ丈の業トレニテ凡難

親切のたのとあづくらへて云ふのを遠忌とほむちう
に供仰施僧の善とほくは寺院説の辛向と
あると中よし俗説の人の九品の伝よつまの題と
云きてだの口代仰とあくらぢちむに是仰房
と教文の所とくあむり

上品 芒 月 雪

叙曰仏說蓮華經ノ趣ニハ極末ニ九品く差別アリテ先
ハ娑婆サ田タノ上座敷論ニモ似タラレ聲言(上口)ニハ無念
無相ノ人ヲ置キ下口ニハ今別理屈ノ者ヲ置テ中品

八有無人境(見)用ナリト知ルレ教六月雪モ芒月鳥モ季
ノ無念相ヨリワハリテ仙苦薩ハセニ鳥ノ園林ニ
遊シ声向縁覓ハ花落葉ノ觀念ラユラス比故ニ
仏家ノ法ニ任セテ極末ノ上口ニハ置タレト佛説ノ家
ニモ食ノ流枕ト名ワケテ嚙ス飲スノ至リクラトムレ
比丘 比丘尼

中品

優婆塞 優婆夷

叙曰世間眾ノ供養トハ一家一門モ禱ラ看シテ節仏ノ
光ニ蟬燭ラヤ、ヤヤシ手作ノ初夙初加子モ今リノ仏
ニト奉リタルハ世界ノ人心ノ中令ト云レ今時ニ比丘

比丘尼優婆塞優婆夷ハ朱枕朱折敷ニ居テラ
テ品弱ノ白和ニ同ラ收ハシソ燒豆腐ノソニ源
ヲコホレテ勤ル功德ハ甚ニ成仏ト名言ナルレ去レト
教迎仰ハ有柄ノ追善ト說キ王ハ達ニハ一向ニ無功
徳トモコナサレシヤ佛諾字ミ此等ノ獻立ラ佛旅園料理
ト名ラツケテ如何ニモ中令ノ振舞ナルレ

下品 團子 新茶

蓮飯 鱷搗

叔口十王ノ勸メを漬ハフド爲トハ腰田カノ譲ナカラム
ノ五千年巻トテモ此道理ニハ過サラン去ヘハ極手ト

ミト喰ハスハ可ラ極手ニヤン喰フテ極手ト需得テ極手ト
ナリ春ハ花ヨリモ圓子ト詭セラレ甘々ハ時鳥ノ一聲
モ新茶ノ香味覺コク可矣シケレ然モ魂条ニ心安キ
仏達ナレハ三日ハ食フタリ歎フタリニテ指シテ需得手ハ
穀ハスヤレ殊ニ蓮飯ハ甚シラアメテまくノ仏ハ若モ
及ハヌ手^{テノタ}スルモ亦極手ナリ鱷搗ノ比ハ云人未ル夜
トテ魏擎ルワサモ都ニハ十キヲ搗後ノ万六猶スル更
トテ之向同ノ母キホラ^{ハクキ}トムフモノ附タラニハ彼ノ
毒鬼モ心ヤハラキテ西ヨ大ノ爲アシカレトハ思フニシ
然ルラ仏家ノ法ニ任セテ極手ノ下品ニ置タレト佛諾

家ニハ上品ノ馳走ト云イテ 騰久比也題ノ中ニ酒ト
者大染モアラハト思フハ叔丈ノ御房ノ僻夏ナラシカ
狂云此等伊ハ全ク靈鷲十カラ十二題ノ註解ハ解体ト今
ギナリ吉レハ九品ノ次オラ方ウニ或ハ上品ト下品トヲ
云イテ中品ハ有無ニニキ立照セル或ハ朱椀朱折敷
ラ經文ノ詣勢ニ卿育セタル或ハ下品ノ四題ラバ逐ニ
注叙レテ一トニ樂テテナラ富貴セナル或ハ歲暮春金鑑
ニ徒然艸ノ詞ラ備ツテ越後ノ方ト取ナレタル況ヤ結詔
ノ狂言ナル此々々佛諦ノ筆はヨリ出テ墨寶ハ水上ノ
葫蘆ラ轉スルニ似テシ但シ是仏房ハ先師ノ角号ナリ

養生主解

李芻

ヒトより評あるニ世相とつむわあり人ト鬼ト人
人亦人也ト月也の批評スリアリテ隣の事す抑
言と評言とどくせんせんを裏のあらそとふるに
あやもあまこときれなきとどてつけておひへ
とづあるくあらそ人あらて和屋の方よほし 亂竹の
遊をすててつづくもとてんがく松モヤマキモア
器用うるひをとむられて裏もろい酒色の向に
在て後よ天年とさむれゆきあらへ醉麻の松と

而一にて此水の豆豆よりうへてこあらひ魔方の毫以ひ
てその種のり牛と鶴モセモ引け利とて鶴がんは
人をもて能くて長かんよハルヤシロのひひと
聖人モセモ引て論もすとモアの長者等
人の利屁とりモキホの金モキホナリトテやるの
股とくすにうな解毒の丸モナリトテ實に
皮ふにほふまみのほうとくとくと遠もてて論
とモ薄エ薄ヤウムベリモテ金屁のまみがん
モモシレ解毒モ誠モ足と薄モヒテヒテモ
ハルシムの鬼神モセモ引モアヒツヒテヒツヒテ

トモシム君王モセモ引モアヒツヒテ聖人
君主の名モあそふ人モモの推人の作也にモモ禁
モモ人間世裏モあそひてモモの聖人モモ禁
禁也モ復達うれ乳とほそりれよモモ禁の弊の
ちもとリソホーリ石と御おももきも馬鹿と
モモの表書きの故ちもとモモ禁の弊の弊の
禁也モ復達うれ乳とほそりれよモモ禁の弊の
弊也モ復達うれ乳と御おももきも馬鹿と
モモの表書きの故ちもとモモ禁の弊の弊の
禁也モ復達うれ乳と御おももきも馬鹿と
モモの表書きの故ちもとモモ禁の弊の弊の
禁也モ復達うれ乳と御おももきも馬鹿と

ひーし處山の東坂と猿と飼ふ事あつて年あり彼つ
筆好めともす。神氣病猿と論へて猿書こ巻とす
ひそり書の見脈のトよつて凡人より五才あり猿
心臓の才あるわに用ひの事多く半足のほりを
とりて足とりて彼うおとちとくせよ。彼毛色
ニ筋毛をそらはす。人よみえふとよ説くす。人
の聲も通ふくまかくよ。彼毛をやく枝へねれ
感一て本性もえ端よやくひてほくべりか。こ字
はいはうるのふくよけふうとくじ。若き毛がけてけ
病とかかぶひれすにまへたの毛とからて冷らす。

峯へたの術とやくて害たりあはば葉の種といりて
うのくと被うたらと種はれいふれ。色あはての高
くあつてのものとふりやうとくわざわざわざ
のふくよたぐと暮四のよほしふ。あをそとく。彼を
自在によす。掌毛薄ハラコ。とあきそくねふとぞと
「彼うり性とそれやしきと。と薛已シナ十種の化に
さに化のじつと。大聖安坐とちあく。傷書と。浩然
の氣と。峯の天令と。かのと。ほうう遠ふと。足りず
の洞ふる猿の空かうと。あうと。猿書と。誠と。行かぬ
詔と。書

の大抵よりはいへんや人のよろこびより氣のすあらぐ人の
ひうし氣のまゆうて喜怒心の附かぬにまつて
くせきと親の子とあらじて氣のふたをあら
あんじと傳仰の補充を称すて行ひゆ
ひそひとあらがうがあらの部ス
アラウ

往云此解ハ全ク在すニシテ在すヨリモ可笑キ及ア
まルハニ世相ノ立里ラレキ長者種ノ子細ラレキ遣訓云
金匱ノ經用ラ明レ猿書ハ吉怒ノニホラ解ス或ハ
何所テカ生テ居ルト云々或ハ急度馬鹿ニ自詮ニ下セル

東ハ張白屋守ヤト總テハ在すニテはヨリ出テ其ハノ格ハ
齊諧志ト云イ遁天刑トモ帝縣解トモ皆ニ其言ロラ
以テ古詔トナセり况ヤ聖人君子ヲ嘲ケリテ雅父ノニテラ
私容セル推ハ通ナリト我宗ノ字訓ラ加フヘキハ醉寐
ニ虚妄ノ對ハレタ而申夙流ナカラ鬼神ニ君王ハ能詔ノ
常詔ニシテ叙迎れ子ノ對ハ口音トモ過當ナリ然ルラ解毒
ニシテ置アキ歩キ更ニ喰タル文集上ノ奇絶ニキ病穢
ノ作意ハ神靈ト云シ但レ比多病ハ在すニテ養生至ラモトキ
テ武朝ノ文章ノ鼓舞ラナセル和漢ノ通用ラ見レタ
レシテ故ニ庄子カ殆ニラウテ人向第一ノ結詔トナセル比等

ニ先師ノ文筆ヲ称レテ北等ニ先師ノ虛實ヲ知ルレ但レ
此等ノ事ト格ヨリ虚實ヲ誤ルモノ有ルレ

地支前大解

相左角

ノリの搜神書に地支前大と云ふあくまで形混沌
の如きから其の事に醍醐の中にあくほく師足と
御うと一切衆生とおつりち歩き足とやうげて
あまらばひとにくりぬよらかくそむひまゆ
ヨリて石鍊子鏡の飴トあわらぐやら辛軟の
飴トありりせされうるまゆく瑞瑞の右鼻口也

とくと津農ハ解體の藏よきくよもやわらき功を立特
とがうて和屋の法およ論あれどもさりてにじわの
あやまとあきて嘗て嘗て人のひととくらんむけ行國の
のとく良のすむかくとく繁りもあらむれりゆく
のとくの人の圓はやくみて故郷の食とおひなす
も家と化する所のすむんとこうわいに近むれねば持
ハシム一にてとを雍州の右内又張れの之後の
佐ものちやセ病瘡の外とぞもむれ陽尾の孫嫡子
もいともゆてとくとくのむとあくとされく新舊の
をりすかすほに片むく飴のうやさかんじらむとせ

のへれそくをもじて取るゝものあらひとくひ古殿買
おきせのノ、首よかやうもひとり高貴にわうはひ
今ちと貪財とうめいをあはらく業厚のひうと
すにまじゆく歎の名よられ秋をむすめを、
もと間万福のもとわとち竹のぼ一枝はばれ五味
ハ珠の膳とぞあれねたゞまのわむすあらむ世裏
のむふくらむとあはれのむやうつてまづてせんすわ
れまじ部とひくさんすくと老妻すうしゆけとあは
すとて教とくらてくとむよきとくとくにとの鬼神
ひ御走の軍の柳とよとくよひよさくわあくし

狂云此解ハ和漢ノ諸物ラ引テ儒仏ノ教ラ體ニ喻ヘタル殊ニ
解体ト云テしまルハ混沌ノモニ取容シテ幾多ノ故古又古語
用イタル實々ハ且ハ書ニ且ハ良アリヤト敬驚クレまじハヌ木辱ノ
狂對ヨリ或ハ花紅葉ノ凡流ナル或ハ鬼神ニ掛乞ラ對レテ
結詣ハ世情ノ溫和ラ云ル誠ニ附詣ノ筆格ラ傳ヘ誠ニ文法
ノ虚實ラ知リテサ雋門ニ此作焉アリト云レ但レ左角ハ
相場角ニシテ仇渡ノ國ニ往返ス素生ハ江東ノ人ナリトソ

傳頃

正直主房傳

西林上人

三ノ國とすやし中比子の國とあやの傳北里と

アヌニヤヒアハシラキルハミアヘシテアケテ何
ヨリカラシラキルハムヘシテアシテシヤムシカ
ニシテアヒシテシラキルハシテアシテシヤムシカ
トケルキシルナキアツアツアツアツアツアツ
ノシテシラキルハシテアシテシヤムシカ
ミウヒアヒテアキナハシテアシテシヤムシカ
ヒシテシラキルハシテアシテシヤムシカ
セナシモアシカシラキルハシテアシテシヤムシカ
保延二年十月十五日

リモモラハヤダニ三房カタハアシテ往生モトシテ
モシテシラキルアキリニシテシラキルアキリニシテ
シテシラキルアキリニシテシラキルアキリニシテ
シテシラキルアキリニシテシラキルアキリニシテ
シテシラキルアキリニシテシラキルアキリニシテ
シテシラキルアキリニシテシラキルアキリニシテ
シテシラキルアキリニシテシラキルアキリニシテ
シテシラキルアキリニシテシラキルアキリニシテ

狂云比傳ハ撰集稱ニ在リテ殊ニセノ入ノ見寳ニシト先ハ
我が國ノ隱逸ラ称ススク次ニ藤六郎カ傳ラ合ハスキサ
志レハ和漢ノ往生傳ラ思フニ紫雲天華ハ經名釋義
ニシテ坐脱立忘ハ禪定水ノ寛活ナラシ偶くし佳ホニ比

内房アリテ曲レルナヤラ往生スハ誠ニ我家ノ祖師トモ
仰クノク誠ニ仰諾ノ筆格トモ讀スシテ西行人ハ
和矣ニハ真俗ノ風情ラ尽シ文豪ニハ虛實ノ自在ラ
得テ左毛音當ノ称スキトヨ人ニ北僧一人ナラカ

江藤六坊傳

名馬波

三井國ニシテ伊トツシニ里行ハサム往キテ御前
アマムカト音カホトシナガシテ御前之をねく御前
ミシヒカトトカヒアシナハ僕僕トヨウアシナ
野のよとキシケルテ山のよとキシケルトヨウアシナ

サマの日お檜と木戸ノキあらびス作ちけの價あれ
木手の門ノトシヒテ一休アリテ極至し言の口
さふまく一もみた西リの人口トシヒテ御前
おひきふくふとくしてらしれゆきあらひうなむ
あく付ハ被ニ宿トカマハテ 碧眼カクイのまめヒテ取る
近里を遠鄉アリシテヨリアリナシやあらわすか
ト市ノよとアリトモアらわすてて底ナシ
スモシテアリトモアのれりあくとまくらつてほの
けふじ代のよとアリタカトヨウハトモナフ
スカカセシカカセシカカセシカカセシカカ

シテナシの如ビ一重さんあすへレ皆ニ宿リテヒセ
スラムアシテソシムトウニ付モハムクルトアシ
アヤトケテソトモウ人ト教誨ト一洞トモケビ
モハ酒れの如御ヨリテミカムトソトモムシト
宇内トシムトモ御ノ代

和云北傳ノ法師ハ凡骨ヲ離テ世ノ眼力六及サランキハ唐
傳灯錄ニモヤウル隱逸傳ニモ北如キ狂僧アリテ或ハ
賢人トモ狂人トモ傳写ノ集表假ニ依ルキナリ誠れモ
春秋ハ丘西ニ居ルキ筆法ナルラヤ東ハ湖明ト西行トハ
和屋ノ凡人ヲ取合セ或ハ一休ト増加タハ言ニ狂僧ノ類

ナラン怒ルラ教誨ノニテニ依ラハむモ市中ノ大陰氏祐
ニシ但ニ作者ハ各智、比ニテ義懐ヒヤウタノ山縣ノ玄度ナリ

白狂傳

東丈寺

名ねと生處キアラムアヒ世トホヘ孤の子ラリト
ヨアリハトトヤセヨモトヤシシミのラミのわ
所くわふらシテ秋の半より年をかくら
もくりあす。三重都の夕に精トシホウ挺とおひだりを鐘樓
のぼり上れおかしくれ。何のちくてあそひありとど
の私高もあや。まつたひあうむのとくせられ

ハシタあれども御用をもてゆくあつたてかくら
あすとまよひのそせ年金てねぐらむかへに
あづち知の入あつてほく聯句ときくもあつて主と
くさき錦とちよてらに韓愈の骨とわざあ先
露かあすけはお老坊の能誥とよこしてみロ筋の能
くさきとくは能誥とよこしてみロ筋の能
のあくじくとくの變化ありて變化の人とかく
なうりこやーの獅子庵の能誥の籍とちよてらに
年、また馬坂東羽すなまと右の老坊下に
すとひすかく野航うが能うやあせせ

アリヤ普通の行人をしらはて白狂のてよとあくに
今とく所家のえオキんり渡^{ワタチ}部のニアなどに
足と行家の別姓ふうほう角聲の時とあひてその
骨柄^{コツガ}ノ骨^{コトハ}をあまとうゆく度^{タマ}れのアモともうりで
渡^{タマ}部狂^{カニ}をあまとうゆく度^{タマ}れのアモともうりで
官名^{カニ}をあまとうゆく度^{タマ}れのアモともうりで
乃^{カニ}もあまとうゆく度^{タマ}れのアモともうりで
狂^{カニ}へ遊戯自在アーテキスとまつてモ長周を
ちとわひるアーテキスせんぐくわかれ^{カニ}と
行^{カニ}とわまく人^{カニ}のわよくとよくさあ

詔人へりくわへるくへとすよおよまやをあひて
もよふもれそきよあそび一海やむむねりより
お利の歌あべてくへ行ゆる雄酒の處あんにせ
まくいぬくとそくまきくと鮑土革本の穴の
中よスルヘリ沙わらを塵アレ傳とあり之織サミセトキモセ
らわすへ傳職置サムシヤシトシカヘ天人の音ニテモセ
一人向う立とのあはれアハレ五表の子コノコトモ
三十錘サツイの付タブねタブにけりて下シタ過ハシりのを
官古カニクのを歎カクトされなほりと田舎カントウの野父ノコヒ
せらそ一過不ハシとそくまきうねノシけりよ人向是非

わすめでたにそ金年サツイアヘ今ハをわねハシト
まへるのふとかくハシ山里ヤマナじくのへそハシ
まへるのふハシ人ハシアヘアハシとあらかハシ一海ハシ月ハシ
の月ハシ人ハシとえハシやハシとハシ人ハシもハシれ
神ハシ人ハシとハシ章ハシとハシとハシ一海ハシ月ハシ
あハシとハシじハシとハシとハシ章ハシの古今ハシ通用ハシとハシ
佛ハシ詔ハシとハシ模ハシ度ハシとハシとハシ狂ハシよハシのれハシとハシ佛ハシ
くよハシのをハシとハシとハシとハシもハシとハシとハシ佛ハシ
アハシれハシとハシとハシとハシとハシとハシ阿ハシ言ハシの遺ハシとハシ金ハシ

アフニトモ甚直行の一脉ナリ汝もれけにとほニテ
霍門よシセの正統あつて祖門よシセの阿難あら
仰法のそれ也ナラキテモトモ一トモトナリ也の
不れあんとや況や向のアヨドモトナリ也の
セ化のみる事と未だモ飾リに一言の釋義と強し
ムキミトモ甚山の厄れありアドモトのアヨドヌ
ヘハ何と所定の其来ミヒ先ソモテ往ハ海達。ナダキ
而月と云ハルんやリナシ傳のアモリケ直肯
の傳とアツトヨト斯文よりアリテナシム
狂云此傳ハ班固カ論鼓タニモ似タラン吉ハ比高僧ニ名利

ト狂酒ヲ名ケテオニ狂フトニ狂フトハ儒仙ニモ詭サル
ニシテ誠ニ代家ノ方言ト云ヘシ或ハ人間哀苦ラ對ル
虚ナレハ忽ニ寔ラムイ宣ヌナレハ却テ虛ラムヘル句對子對ル
ノ自在ラ祐スヘシ但レヌハニミ猿トハ本ヨリニムメノ通韵ニ
テ娘ト娘トノ和詔ラ夫ル一シヌハヌ主韋ノ法格ラ免セル
作詔ノ様垂ラ免ガルハ古今ニ俳詔ノ零言ニシテ前毛妻
化ノ入ラ待スト云ヘル肩尾ノ文法ラ見ルキナリ増ニテ擅
ノ度理ラムルニシテ白狂ニキモ孤ノニモ急ニ肩毛
山傳ノ中ノ骨節ニシテ白狂ニキモ孤ノニモ急ニ肩毛
拂ツテ肩破スシ但ナ黄山ハ先師ノ別荘ニメ白狂を掌文術

記類

枕記

貞室

敷ぬの枕、床もの仰りみてをひ田すつわと
くわやうとすとすとけ角とせす。寢て參うれし人
ほぬと自らかくに性のやるとすけゆる。人
も足とひくとさうとあきとすとまくとく
形とまくとみとく所渭との角とあまくま
とくらきけむに國の事へせよと金行一郎が中畠
わね、お花にふくのふくへらして金行一郎の金井あ
二川の松と求てたのたかすてあまくまくはくの

業の本に園松あわせの形とくとくとふとくとく
りの内に清千と方石をくわへやうとおもとよひと
えやあらそとがちのそれうふとかわくりとじむ
ひじくと肥丁脣のまくらをくふくふくふく
むり寝てゆきをひかくおもとくとくとくとく
あくらせんて體のあくらとくとくとくとくとく
かうきかくらひくとくとくとくとくとくとくとく
園松とよすとよすとよすとよすとよすとよすと
詔書とよすとよすとよすとよすとよすとよすと
草とよすとよすとよすとよすとよすとよすとよすと

幸と中風とぬども石と頭痛とひさまじくあらぬ
うそとやまよほるれあよてばかといひうじや
或にかくのなまうてけニ花とあやして根附き
やりうるじともいにけ記とかくたのくよすよ
む云け記ハセニ傳写シテ正馬の語モ有ルキカマレト
此壳人ハ俳諧ノ中魚ニシテ芳野山ニ花ヲ詠シ隅田川
ニ鳥ヲ吟ス當時正月ノ祖ト云レ然ルニサノ名ニ寄
セテ方圓ノ松ヲ形容セル老ノ霊覺ノ葉占カラ儀
ノツアリノ結語ニ到ケテ虚實自在ト称シ但此老
ハ晩年ニ俳諧ヲ知ルカ自己ノ短冊ヲハ度捨ケルトソ

白蓮堂記

表題凡

一堂ありて御ヒリテ名トテ名ハ御名也
御子の名也よりては御ありてせとまわて御に
頬てくと養いじつとくやしてやむあるを築
スケときめかす本とやとりゆかれてお湯と元ふの
うちおほむとわねえ荆棘のらざれくとくらも
實に指せんとあふとひくとすハ故のれひむら一ト
四三のふことくとくわく代人の助力とくらと自らの
手引とすにいやまとよへ足と毛く附をよすに

はあらうと即ち時、乾坤の氣もあらへて風雲の
氣もあらへるやう御靈夜の氣もあらへんやうと
あらうらにほれのうらう山聲の音様とゆううにて
市内と遙かに塵と風とつむに匂ひかれておのじよ
仰天ふのあれじつたがりある西が上への波を
たゞあはれひとアリテ風もテ風もテアリテ
序達は所の力のあらへくよ又集
ウタヒアリハモアリテ振舞浦くちらふかよす
孤舟とあらきあくよまかよ夜をひそめ
狼主とあくば風のよみにかかればひづね

てうなごとくせみふとくとくじゆうか一叶とくぢりて
叶行ふと引て走れまへ何とあらやせし月を
はらうにまわうてえどくのまわうてわらうと
強て走上ゝ禪とほら一葉をよどて殺風景の
きくひきてくのくじらふく走らすせじふてせどく
くとくわんまくまくわくふくとがくじくわ
く叶すのむきとくまくわく一叶て初秋の信
あらじきとくのむきとくまくわくかくじてそとく
あらのとくとくわくわくわくの禅拂ふとく
て叶一張のさくとくまくわくやせやうのわの故と

あくべはくへ阿志のこゑと鼓觸とひよしがふ
コアヘタとかくもあらんじきくわざをば捕
あくちり庭と咲とねりあらうにくわうすと次
志のえとお一升の豆月をよりあざれてくわ
て坂せやのほほんとくわかども捕とあらざとそれ
折しむりおまつとくわんと仲のまみへくわい
もまつとよやけとあつまく在るとまくわかとれと
は陽の月あらにくわんといたすとくわくわくわ
う歎情、年くと解く因思ひとほひと津や
人よみれいは意の解とよこまつ戯とよけとく

ゆくとくよ行のほりてうたふとくに想ふがゆ
あくちり一室のがくかくとくとくの和室
ときわゆれわらふがくかく和室と種と御者
草古とくらやうと離とあと物と物と離離うと
あとじもあらわるのうたうとくとくとくと
のあらさとくらゆるがくかくとくとくとくと
ほらくはせの離離とくとく離とくとくとく
のあらさとくとくとくとくとくとくとくとく
おわらすとくとくとくとくとくとくとくとく

絶する事無くして、其のやさる氣のあらはさうも
人情の如きをひきとひて、其の事にすばらしくかん
ややと詠せたるの意あふれりて、やがての色もやがての
もやと詠そて、^{タツ}臺吾の筆花と云ふふと實に此に
ハ近づきと見ゆる。一きじもひだりと詠ふと、人をかみしむ
筆とひかれて、其をまたい渡す幅中と云ふよて花の
さくにとるやや、^{シテ}おもての面にかかへて、^{シテ}宿印
せくやとちぎて、草とすみやかに、^{シテ}輪とせくつて、^{シテ}宿印
と、^{シテ}腰と、^{シテ}年のかどりと、^{シテ}あくねと、^{シテ}毛と、^{シテ}化の毛と
ひきかへりて、^{シテ}其の辭と和めて、^{シテ}草もの語と

あきよし人の手を行まつて、^{シテ}沙うじたの迷ふる徑を長向
うけと、^{シテ}まかやと、^{シテ}せはるよと、^{シテ}なまくと、^{シテ}じよと
熟へし、^{シテ}其の間には、^{シテ}かじらわざの弱
はくさくわざの弱、^{シテ}長向ふねぐと、^{シテ}危まず弱、^{シテ}柔
あくねくと、^{シテ}も細と、^{シテ}お詫のりと、^{シテ}セ臺か盛と、^{シテ}似
たるは景徳と、^{シテ}一張の御帳と、^{シテ}長向うと、^{シテ}お詫と
御名と、^{シテ}工手拂の指圖と、^{シテ}も細と、^{シテ}お詫の拂
袖すくの弱と、^{シテ}腰と、^{シテ}宿印の弱所即の弱と、^{シテ}お詫と
お詫と、^{シテ}沙うじたの匂と、^{シテ}あくねくと、^{シテ}宣せ
むと、^{シテ}沙うじたのは、^{シテ}沙うじたの起と、^{シテ}あくねくと、^{シテ}お詫と

竹の自由ありてはんとむかひを御のふと笑つて曰ふ
むふの自在あるべからひうら室玉う賦す巫山の神す
と國うるよしと老をまゝ記す水仙の靈と勤めとへ
佐野をすとくまにまわるやとまな中のまわと報せ
祀よりとひきまくわくねり也

狂云此記ハ殊ニ靈寔次第得テ誠和子ノ遠徵ヨリ誠ニ備誥
人戲詼アリ去レハ白鷺ノニネラ以テ一張ノ紳帳ヲ形容セ
始ハ権先生ノニナホノメカレ終ハ紳帳ノニヨミ頭ヘル故等
萬靈ノ権トヤ云キ亥ハ一篇ノ文章ニ兩所ニ西東モ危鳥
フ云ヘル前ハ角アノニキラ陳スヨリ紳帳ニ西季ノ夙流ラ

寄日アシヤ其ノ夜ト其ラ墨子タル文三文中ノ文アリト云
後ハ庭ノニヨリ梅櫻ノ四季アムニ總ニ堂中ト堂外ト
ニ西様ノ花鳥ラ合ノ万ケテ前六四季ノ情ラ云イ後ニ西季
次サラ云ヘル西处ノ用ラ見キナリ殊ニハ四季ノ結詣トメ春ラ
迎ルト肩捨テ四季ノ次中ノ行ワニラリ但シ文章ノ体ナシ
麥ハ御事寝ヤ待心トハ忙子ノ逍遙ニ待ノニモラ備ツテ圓扇ノ
风ラ肩ナセルミリ和漫ニ古詩ヲ獨ニ石亭ラ挿リテ尤全體
ノ故草文ヲ用イタル讀人ハ容易ニ肩當ス(カラス巻)ハ此記
結文ハ其葉毛カ水仙ノ靈ラ招キテ羨色ノ歎レラス合せ
ハ前ニ翠翠アビフキトモ其ハレハ併ヒニ添ヒテトモ愛別情

ラ含メタル作者ニ一節ノ意アリテ前テ思ハルヘナシヤ
レ故ニ其後ト云ヨリ楚王ノ遊ニ美酒佳肴ヲ設テ水仙
三思體ヲ待ツニ思イモ高貴ラス法師ヲ出シテニ方丈記、雖
陳ヲ題シ高居賦ノ虛實ニ致フ室ヲ佛説筆格ト
シテ詩音ノ文法ヲスセウト稀スヘシ但レ作者ハ接ノ伊丹ニ
生産シテ森林氏ノ隠者ナリ前ノ在園モ伊丹ノ別号トフ

柳子庵記

李文忠

柳子庵のやすらづれの意ありていつとのふよげりと
よしとよしと次もうへ在園させとゆきうきと何有の

柳子庵のやすらづれの意ありていつとのふよげりと
よしとよしと次もうへ在園させとゆきうきと何有の
のふとかほくしまさあはいとひとゆきとあくじてゐの
いのむれいとまもるのをうんじーとゆきの園コロで
ゆきのまもるのゆうめに山うけのけうとすね
喜素よりまきひてとせあのねのゆの歸とそくわぬは
やまととよせねのゆの陰とそくじをひかへたるやの集
えすねをせとの柳子庵とくらべやひやひやひやひや
えりかひらへとゆきとくもふあらじやひやひやひやひや
流も遠く塵のやーらひあらんとやかーと武将の行

さ行ふやのねくらむはてきまわに柳よれた母のもも
もあからず仰しとせのやうもあれぐらじかと
波瀬くちきのよみあをくと園庭に仰せ
ゆうてはるやたまう一抱の柳よ庵めりて人向の足非
よ飽くばらけのゆれあすかん庭まなみ株の
ねと枝と一聲一萬の五葉よりせふやまくのほり
わいおちとせくらう倒ぬうとけも還て附障籬
う幕とくは室と旅館のくわうかこも左編め
くゆるくはれと父母のあはとくひもくにかくよ
ゆゆもあわくこくくにひよけあよゆりありて正月の競

きとくわきよまき傳のやうてこすかあやりと
らふす金の圓えりて金のよとちもよと經
きやうのねとあの娘とよくしげせうだのよ乃
くらひてやとすとてやうかくふくつゝあきく
金の圓えりて金の人とよくしんむれと
まくはりてやとやとくふくとよくせらあやと
やうかうらんじく維摩とニカぶのほああう
のあうとハ万の柳よと置きまくつだと腰三のね
もくへりんをえたりの柳よ庵うあうてあう
の客とあくあくとすとくせうだのあう國

ありてやれの蓮花とよもよわくすくの仰と云ふる
こく一庵よりに一お花あぐーくうりゆかは長ゆ
とニヨの記ス御事と至てれどと極事と云ひあく
ひうきの庵にての長ゆとよしらうとをなす
ちやうじとねまくゆくあるとこがたのやうら言
玉あつてえとに御子庵のふと書きまつ實にとある
みふうとありゆ

右云此記ニ故夏古詔ラ用ル夏緒テハヤハ五眞アリテ
種々ノ文格ハ有ナララ先ハ頑挫ノ法ト云シセヨリ一筆
ノ句對字對ハ例ニ先師ノ筆格ナレト竹ニ雀ノ油文ニ

至リタ見ル者ハ多ニ絶倒スレ皆レハ仁人宅ヲ云イナカラ
シトムナトハ西行ノ詞ニ寄セテ其次ノ二句ラ云イナセル是双角
伝トミヘレ或ハ梅檀ノ御子ニ禪録ラ用イ東ハ無教蓮
花ニ仙桂ヲ出ヒル但レ一東芳也ハ東坡カ詞ヨリ天也東坡
ノ鄉音ナラン去レハ比似扁ノ骨筋ハ中向ニ古鄉ノ御子庵ヲ
記レテ哀モニ情ヲ眉ナセル此等ラ虚實ノ文鑑ト
エイテ諺ニ千視万瞻ニ飽サラン

往來ノ松ノ記

江心院

之が圓加ゆの筆の西より一本の石ありてせつまくやう

さつひだとの言と月とよしとよしのふに一種を解して
龍蛇の屬曲とあらわすよきらうにあらかじ
もうにけふと往來のむくにせせとせよの月流
えひて文官武將の歌とさん歌とげの口號
とあらゆにやまとへらふみとくとくと御宿は集
のねとよせらすまのれ難事たるるよきのむ
ほくとよめあひて又のあはうかねとこくとくに極ま
のこちりうてよ御のねにかがやかなのむとくとく
ちか一トヤーとあらゆの月と舟と船の川りゆ
流れとよき橋のまよやすわゆのうちま

すや西と伊吹のふにくうねくとほいまで
せよせよとまようて一から江口の門宿やいはの
まよせよとまよてかの町もとすれ、顧況う庭のね
うはしてそち終末のねの後よく旅人のそりと
よもよもとすれよよよよの風情とあらうてよきうきの
きうきうあやめ衣やわよぞとくら風流のふとわく
そのあらうねよよのねもよなとうやむくよ
ね云北記ハ賦シテ記體ナリ志ハ數箇ノ名所ノ中ニモ
富祇ノ梅ハ鏡鳴乞津寺ニ名白アリテ智通ノ松櫻ハ
西莊ノ立政寺ニ名ラ残セリ或ハ江口津ナトハ天文氏ノ

古戰場ニミテ伊吹櫻並モハ當國、名勝ナリ然ルニ遠寺
ノ櫻丈セラ桃ますノ蹊ニムイ寄セタル定家卿ノ向雲
寔ノ初雪ニ紛ヘタル珠ニ顧況カ子親ノ詩ヨリ往來ノ旅人
ノ情ヲ駆ヌタル總テハ和厚ノ故夏古詔ヲ用ルニ應用
自在ノ文筆ト称スシ然ルヲ結語ハ我國ノ名松ヲ借テ當面
ノ松ヲ墨言ナセル此筆モラ不根ノ持論トハ云ヘシ

六丈亭記

西丈亭

此草社もとよりすと能ひよ雪のまゝふとなむ
て時雨亭に對りまたあんじらひ蓋の門のまゝあれ

ひされふわふうのうしんと草社あつてあらわとみや御證
とより和亭とあそじらんとまゝノ禪法の仰座より
ちや念仰とぞありのうと禪法あわた御説もやのも若
ううち連うとぞありと御説あらじひ故に青の盆
もうち多く水を水うちてとけやーとくと雪が付る
とよーてう老人の顔とほんじうと草社あらじもまにん
うけぬらしてあらじと盤たうて草のやうとみだれ
たのを割そ西丈をほもうかと被そ西丈寺ゆうり
中く富もんぐらうりのやし

右云此記ハ例ノ筆拾ナカラ益ハ所看ノ体トモニシカ但レ
古モハ雪ノ里名ナリトソムヘテ古ノニモヨリ起リテ時雨
ニテニ對シタル教禪ハ其ハシカ喻ニシテ連音ト仰講ヲ
争フニ似タレト畢竟ハ雪ノ時雨ニ勝シト称シテ貧富
ノ勝劣カハ文立卓ノ虚實ナリ但レニ平ハ伍ノ下深井
ニ在リテ盤古ハ其主ノ能名ナリ

